

共同研究プロジェクト「人類社会の進化史的基盤研究（２）」2010年度第1回（通算第7回）

日時：2010年4月29日（木）13時～18時30分

2010年4月30日（金）10時～12時45分

場所：AA研小会議室（302）

内容：

1) 春日直樹（AA研共同研究員、一橋大）

「存在論的人类学へ向けて：ミニブタとヒトをめぐる部分的接続」

2) 星泉（AA研）

「ルールは誰が決めている？：社会脳とことば」

3) 山越言（AA研共同研究員、京都大）

「チンパンジーの社会組織に関する地域差とその要因」

内容の要旨

1) 春日直樹「存在論的人类学へ向けて：ミニブタとヒトをめぐる部分的接続」

本発表は制度の存立を考える準備として、ヒトと他の哺乳類との比較についての柔軟なあり方を検討した。まずは、発表者が調査してきたフィジーの公立老人ホームにおける入居者および介護人たち、また医薬品の実験用に作出されるミニブタと管理者たちについて、それぞれの関係を比較することをこころみた。キーワードにもちいたのは、近年に生物学を中心に注目を集める「アナロジー」である。

入居者と介護人、ミニブタと管理者は、それぞれアガンベンの言葉でいう「ゾーエー」「ビオス」において対照的な関係を構成するが、入居者自身、ミニブタ自体の論理はこの関係に抵触しない範囲で独自のものとして抽出できる。とくに入居者は、生を管理する「自然普遍主義」に対して「精神普遍主義」とも称すべき世界を構築している。ミニブタの論理を厳密に提示することは至難だが、公立老人ホームの入居者との間にアナログな「部分的接続」をみいだしながら、その接続をつうじて両者のあり方を描き出すことは可能である。

両者はともに、長い時間を積極的な生命活動でも休息でもないことに費やしており、生の緊張からの解放を選好しているようにみえる。この特有な時間は、過去—現在—未来の通念的な継起性に照らすと、脱時間化と多時間化という接続を形成している。しかも同様な時間のあり方は、管理者や介護人たち——生をケアする側——の依拠する「自然普遍主義」的な実践にもアナログ的にみいだすことができる。

「アナロジー」をつうじた比較の可能性がこの先どこまで広げられるのかについては、今後さらに検討していく必要がある。

2) 星泉「ルールは誰が決めている？：社会脳とことば」

本発表では、人間社会における「制度」的なものの基盤となっている言語を人間の脳と社会の間に位置するネットワーク構造としてとらえ、言語の運用ルールである文法が、どのように形成されるのか、どのように変化していくのか、という点について考察した。

藤井直敬氏の社会脳（ソーシャルブレインズ）の研究によれば、ヒトの脳が機能拡張した背景には、ヒトの脳が、神経細胞がたくさん詰まった六層のネットワーク構造である「カラム構造」からなり、それを基本ユニットとして、複雑な神経ネットワークを多重構造で進化させることが

できた。それゆえ、大量の情報処理を可能にする「情報構造化能力」を持ったという点が大きいという。すなわち、ヒトの脳は、すでにあるもの（カラム構造）の数を増やして新しい機能とスケラビリティを確保する、というやり方で進化してきたという。このことと、消費できるエネルギーが限られているという制約から、ヒトはなるべく少ない認知コストで、最適な社会環境を維持しなければならない状況におかれていると考えられるという。ヒトが集団を形成してできる社会という場でも、社会集団はなるべく認知コストが少ないほうが望ましく、それゆえ様々なルール、伝統が形成されていく。そしてまた、いったん獲得されたルールも、他者との相互作用を契機に、常に新しいルールとして生まれ変わっていくと見なすことができる。

藤井氏の指摘するように社会のルールをとらえると、言語もまた音韻であれ、文法であれ、こうしたヒトの脳の構造的な進化と制約の中で生み出され、並行的なネットワーク構造を持つ現象と考えることができる。同じルールを共有するメンバーの間で、相互作用を行うことで、言語が維持、実行されている。そして相互作用を行うことで、新しい文法が常に作り続けられているのである。旧知のルール、社会環境を維持するためのルールに従おうとする同調の圧力があり、なおかつ他者との相互作用が増加し、多様になればなるほど変化の契機が増えると言える。

こうした考察をふまえ、特に言語の変化がどのように起こっていくか、という側面に焦点を当てて、発表者が実際に研究している現代チベット語の調査と、十四世紀に書かれた文献に残されたチベット語の調査の比較を通じて、言語のルールが変容していく様子を「文文化」(語彙的な意味を持つ要素が汎用性が高まることで実体的な意味を失い、文法機能を表す要素に変化していくという現象を指す) というキーワードを使って事例紹介した。

最初の事例は、mkhan という接辞が、古い時代には名詞の語幹と結合して「～の専門家」という意味しか表さなかったのが、後代になって動詞と結合するようになり、汎用性が高まって「～する人」という意味に変化し、さらにはその後ろに別の動詞を伴うことによって動詞述語としての用法を発展させて「これから～することになっている」という意味で用いられるようになったという事例を紹介した。名詞語幹だけでなく動詞語幹とも結合するという選択をある時代の人がとがしたことによってその後の変化の道筋が付けられた事例である。

次の事例では、既存のルールの解釈が変化して、別のルールの生成に影響を与えた可能性があることを示した。チベット語にはウチとソトとも呼べる判断基準によって yin と red という二種の判断動詞を選択している。このウチとソトという判断基準は、存在動詞における「所有」と「存在」という意味的な対立の解釈が徐々に変化していくことで得られたものではないかと考えられる。9～11 世紀の文献では、所有 (もともとある)、存在 (いまある) という意味的な対立をもって用いられていた yod と' dug という二種の存在動詞は、14 世紀の文献では、話し手にとって定着した知識 (定着知) であるか、その場の観察によって得られた知識 (観察知) であるか、という対立で使い分けられるようになった。この使い分けには、自分の話をするなら前者、他者の話をするなら後者という一定の傾向が見られる。一步踏み込んで言えば、定着知に自分の知っているものを開陳するという側面、観察知に他者を見つめるまなざしという側面があり、自分と他者、すなわちウチとソトという対立が内包されていると考えることができる。この内包されたウチとソトの対立が、歴史的には一つしかなかった判断動詞に、二項対立の成立をうながした可能性があると考えられる。この対立関係の背景として、地域間交流の発展を考慮に入れる必要がある。18 世紀の東チベットの文献には判断動詞 red が頻繁に使用されているという報告があり、さらに東チベットの文化的発展と中央チベットと東チベットの人的交流が、中央チベットの言語に影響を与えた可能性は否定できない。さらに、yin と red のウチとソトの二項対立

は、存在動詞の定着知用法の yod と yog red のウチとソトの二項対立をもたらしていることも述べた。

変化のきっかけは「特定の誰か(たち)」が作るものかもしれないが、一旦人びとの間で広がりはじめ、当たり前になると、今度はその当たり前なものが別の当たり前を生み出す呼び水となるのである。結果的に「みんな」の手で変化を引き起こしてしまっていた、としか言いようのない現象である。

3) 山越言「チンパンジーの社会組織に関する地域差とその要因」

野生チンパンジーとボノボは、単位集団(コミュニティ)の内部で、メンバーや大きさが常に変動するサブグループ(パーティ)を形成する離合集散型の社会を持つ。離合集散の動態が食物資源をめぐる種内個体間競争によって影響を受けるという仮説のもと、サブグループサイズと主要食物の季節変動の相関に注目する研究が行われてきた。ボノボはチンパンジーに比べ、平均的に大きなサブグループを形成し、メス同士の社会関係も密であることが指摘されていた。その理由として、チンパンジーは果実不足期に依存しなくてはならない地上性草本に関してゴリラと競合するが、ゴリラと生息域が重ならないボノボはそのような競合から自由であるためである、という仮説が提唱され、各地で検証が試みられた。さらにこの仮説は、サブグループサイズが生態学的に限定されないボノボでは、メスが団結してオスの攻撃性に対抗することができ、結果として子殺しなどの少ない平和的な社会が形成される、と主張している。20年にわたる検証作業によって地上性草本の重要性は否定されつつあるが、地上性草本を他の食物を含む食物競争一般に置き換えれば、仮説の根幹自体はまだ魅力を失っていない。一方、ダホメギャップで現在のゴリラの生息域と断絶している西アフリカのチンパンジーは、地上性草本仮説が想定する地理的条件としてはボノボと同位相にある。たとえば発表者が研究しているギニア・ボソウのチンパンジー集団では、果実不足期の地上性草本への依存は見られないものの、メスの集合性の高さや子殺しが希なことなど、地上性草本仮説の視点から見て、ボノボとの興味深い共通点が観察されている。コートジボワールのタイ国立公園のチンパンジー集団でも、一貫してメスの社会関係は密であり、東アフリカのチンパンジーよりはむしろボノボ的に見える。アフリカの熱帯林を舞台にして、ゴリラ、東西チンパンジー、ボノボの進化史を再構築する作業は発展途上である。とくにゴリラと東アフリカのチンパンジーが同所的に生息することがもたらす、両者の社会・生態への多面的な影響を分析することが当面の最重要課題であろう。また、これらの進化史的・生態学的な要因が、種・亜種間の社会的な相違をどこまで説明できるのかについての検討も必要であろう。